

国立天文台・天文情報センター・特別客員研究員 中桐正夫

*** 黒田清輝が描いた初代東京天文台長寺尾寿の肖像画**

寺尾寿は初代東京天文台長で、その職に31年もいた。この寺尾寿の肖像画が知られている。この肖像画を描いた黒田清輝生誕150年を記念して東京国立博物館で2016年3月23日～5月15日の間「生誕150年黒田清輝（日本近代絵画の巨匠）」という特別展が開催されていた。国立天文台の談話会に来られていた国立天文台名誉教授平山淳氏から、この特別展に寺尾寿の肖像画が展示されていたという話を伺った。平山さんは、図録は買わなかったが・・・と言われていたので、筆者はこの図録を購入した（図1）。



図1 図録表紙「湖畔」の一部

この図録の中に、見慣れた東京天文台初代台長寺尾寿の肖像画が「167 寺尾寿博士像」（図2）として収録されている。制作年は1909年(明治42)、カンヴァス、油彩、705x550 東京国立博物館 第3回文展(1909)とあり、解説文には、「寺尾寿(1855～1923)は天文学者、数学者。福岡藩士の家に生まれ、1878年(明治11)に東京大学理学部物理学科を卒業、翌年からパリ大学に留学して数学と天体力学を学び1883年に帰国。翌年から東京大学で天

体力学、天文学を講じ、1888年に東京天文台が設立されるとその初代台長となるなど、日本の天文学の礎を築いた。第3回文展に〈鉄砲百合〉(No.152)とともに出品された本作については、「美術新報」9-1(1909年11月)に制作に関する黒田の談話がのせられている。その談話によると、もともと黒田は留学から帰国したばかりの寺尾寿にフランス語を学んだ縁故があった。天文台在職25年を祝して、大学教授や有志の依頼により寺尾へ贈るために描くことになったという。黒田としても「大に幸福を感じたところで、大に博士の性格を表さうと思って画いた、勿論写真からではなく、博士に座ってもらって画いた」と、恩師の肖像画制作に意気込んで取り組んだことがうかがえる。本作は寺尾家に伝えられた後、1941年(昭和16年)に文部省へ寄贈、美術研究所に移管され収蔵された。(塩谷)」とある。



図2 黒田清輝による寺尾寿の肖像画

(「生誕150年黒田清輝(日本近代絵画の巨匠)」図録から)

この肖像画は東京大学関係者が寺尾寿の天文台在職25年を祝して有志が寺尾寿の贈るために制作されたと書かれており、パリ大学から帰国の翌年1884年から東京大学で教鞭をとったと書かれていることから、また1909年6月5日に寺尾寿教授東京大学在職25年の祝賀会が催されていることにも符合する。筆者はこの祝賀会の記念の集合写真(写真1)を入手している。これらについてはアーカイブ室新聞第18号、22号に詳しい。図3の左の写

真は寺尾教授の東京大学在職 25 年祝賀会の中心に映っている寺尾寿の写真である。この肖像画と並べてみる (図 3)。



写真 1 寺尾教授在職 25 年祝賀会の記念写真



図 3 祝賀会の寺尾寿と肖像画

図 3 を見ると、ほぼ同時期のものであることは明白である。

寺尾寿が東京天文台の初代台長である。そして古在由秀第 11 代台長が東京天文台の最後の台長である。古在さんは初代国立天文台長でもあり、通算 13 年間台長職にあった。現在では国立天文台長は規則で 6 年しかその職にいられない。寺尾寿が 31 年間台長職にあったことは驚くべき長さである。

これらアーカイブ新聞の記事にお気づきのことがあれば、編集者中桐にご連絡いただければ幸いです。中桐のメールアドレスは、arcnaoj@pub.mtk.nao.ac.jp